【研究レポート】
島田文化・芸術活動小史
～明治以降の展覧会における美術家たちの活動を中心に～

学芸員　坂巻　隆一

はじめに

現在に至る島田の文化・芸術活動のはじまりは、江戸時代後期に遡ることができる。これを裏付ける資料としては、享和3(1803)年に大須賀鬼卵(おおすかきらん)により刊行された『東海道人物誌』の中で島田駅(宿)には30名の文人の名が記載されていることから、その一端が推察できる。その数は県内の東海道22駅のなかで、掛川、見附、三島駅に次ぐもので、活動内容は、俳諧・(漢)詩・書・和歌・狂歌・画・国学・漢学・文章・乱舞・小鼓・大鼓・音楽・碁・茶道・古銭・印章・医など幅広い分野に及び、活発な文化・芸術活動が認められる。この背景として、江戸時代後期になると大井川の川越制度下での旅人、文人等の往来や交流が盛んになったことがあげられる。特に参勤交代時大名に従ってきた文人と、島田宿本陣を務めた置塩、大久保、村松家を仲立ちとして、その周辺の森、秋野、桑原、飯塚家といった素封家との間に情報・文化交流が盛んに行われたことも島田独自の文化・芸術活動が活発となった一因と考えられる。

ここでは、明治時代の「島田学校開業書画展」の様子や大正時代に蘭契会(らんけいかい)が行った「三美展覧会」の活動の様子、昭和時代の温知洞(おんちどう)(画廊)での絵画(水彩・油彩画)を中心とした美術活動の一端を画廊の活動とともに紹介し、当地方における江戸時代以後の文化・芸術活動が現代までどう継承されていったか、その足跡を探るものである。

1. 明治・大正期の文化・芸術活動

近代における当地方の文化・芸術活動については、資料が乏しいなか明治11(1878)年の島田学校開業時に実施された「島田学校開業書画展」や明治時代後半に組織された島田青年会が発端となり、大正8(1919)年に結成された蘭契会が実施した文化・芸術活動を取り上げ説明する。

○「島田学校開業書画展」に見る文化・芸術活動

島田学校開業の経緯については、『島田市史下巻』や『島田の学校史』によると、明治6(1873)年9月に柳町地内にあった元郡政役所を仮の校舎に「島田郷舎」(島田郷学校)として開校したが、明治8(1875)年3月に失火のため全焼したため、快林寺本堂(幸町)を仮教場にして運営されている。その後、明治10(1877)年3月には林幽舎(りんゆうしゃ)(祇園町)、聖川舎(せいせんしゃ)(河原町)を島田郷舎に合併して「島田学校」と改称している。児童数は男子211名、女子83名で、責任者(校長)は天野廉(あまのれん)(書家としても活躍、号は緑天(りょくてん)。徳川慶喜公に謁見し、校名である「島田学校」【画像1】揮毫を依頼)が着任している。翌年、島田学校は以前開校していた柳町に校舎を新築することになり、明治11(1878)年3月に着工し、8月には竣工している。その校舎落成記念として8月4日に開校式が行われ、併せて書画展覧会が新築校舎内で開催されている。

その様子は、当時開催を記念して配布した『島田学校書画展観録』(「明治11年8月刻　島田学校開業書画展覧録　本校蔵版」【画像2・3】)に詳しく記されている。また校舎落成の様子は、巻頭近くに飯塚九如(いいづかきゅうにょ)(禎・通称為八)が「島田黌勝景」【画像4】と題し、新築された校舎を描いた俯瞰図が掲載されている。九如は最後の川庄屋を明治3年まで務めた人物で、桑原桂叢(くわばらけいそう)を師にもち、書や画に優れた才能を発揮した文人としても知られている。またこの展覧会を主催した會幹(幹事)の一人として秋野、森氏とともに名を連ねている【画像10】。その他、江戸時代島田宿の下本陣役を務めた置塩家の当主である置塩維裕(おしおいゆう)(棠園(とうえん))が明治7(1874)年には聖川舎の訓導(くんどう)(教員)として採用され明治12(1879)年10月まで島田学校に勤務しており、この展覧会の運営を支えていたことが想像できる。その後、置塩は大正6

(1917)年には島田町長に当選し、蘭契会の活動を支援することになる。

具体的な展覧会の内容ついては、「文具品目」、「煎茶席」、「第2席」と記されており、文具品や茶道具類の展示と煎茶席が設けられていたことがわかる。まず名家から持ち寄った掛け軸や香炉、花瓶、長方盆、文具類を床の間風に配置した展示風景や横額、煎茶道具などを配した煎茶席風景が図として掲載されている【画像5・6】。次に、これに伴う文具や茶具などの出品目録があり、町外からは、伊東(西京)、丸尾(池新田)、鳥井(掛川)、前田(田中)、梅澤(静岡)ら各氏の名がみられ、町内では天野、土屋、森、秋野、飯塚、桑原、桜井、長野、石間の各氏、白岩寺の寺院名が確認できる。ちなみに煎茶席の茗主は天野、石間氏、2席では長野氏がこれを務めている。

一方、書画展の出品目録は「書画展観録」として記載されている。その内容は、第一室、第二室、第三室に別れており、第一、二室【画像7・8】には島田町外から招待された名家の所蔵作品が2室合わせて 90 点ほど展示されており、第三室【画像9】では島田町内の名家の所蔵作品 60 点が確認できる。町外招待者は、第一室では伊藤(西京)、山崎・鈴木(掛川)、山田(森町)、戸田(高御所)、小林(兵太夫)、碓井(上泉)、池谷(築地村)、飯塚(大幡村)、久保田(川尻村)、大野・村上(沼津)、高田(柏尾村)、吉原(山原村)の各氏、第二室は長野・北村・宮原・百木・安間(静岡)の各氏と金花堂(静岡)、そして伊佐(谷口原・伊佐新次郎の作品か)、松村(焼津)、飯高(田中)、大塚・大井(藤枝)の各氏、蓮生寺(藤枝)、慶寿精舎(町内大草か)等の寺院が名を連ねる。町内では、第三室に桑原、清水、石間、土屋、塚本、桜井、天野、八木、秋野、森、飯塚の各氏が出品している。作品は、各名家所蔵の漢詩や花鳥、山水を題材にした書画の名品が展示されていることがこの目録により推測できる。巻末には、前述したように主催者「會幹(幹事)」として秋野有嘉、森正節、飯塚九如の名があり、清水謙治、清水研勇、松本豊吉、清水正蔵、清水鶴巣、松琴堂が補助している【画像 11】。その上段に記された編集後記では、町内外の同好の士の所蔵する名品を集め、盛大な展示会が開催されたことのお礼が書かれている【画像 10】。

この展覧会を通じてわかることは、江戸時代以降、大井川の川越制度を発端として、島田に芽吹いた文化・芸術活動が、明治期に入り飯塚九如や天野緑天などの美術家と、江戸時代から伝わる文人書・画作品や茶道具、文具類などの名品を収蔵する名家(桑原、清水、石間、土屋、塚本、桜井、八木、秋野、森氏) の連携によって実施されたことである。また、これらの収蔵作品等は、町内名家に引き継がれ保有されており、そのネットワークを駆使し、県内の同好の士に呼びかけ実施した事業であったことがわかる。このように江戸時代後期から『東海道人物誌』にもみられる島田宿における文人の多彩な文化・芸術活動の継承とその公開活動は、この展観会ひとつをとっても伺えるものである。

○蘭契会「三美展覧会」での文化・芸術活動

近代における当地方のもう一つの文化・芸術活動は、明治時代後半に組織された島田青年会が発端となり、大正8年に結成された蘭契会が実施した活動があげられる。その活動内容は、清水真一、八木利一氏らが中心となり中央から一流の学者や文化人を講師陣に招聘し、文化講壇、夏期講座、展覧会、洋楽演奏会(音楽会)などを実施している。

ここでは、おもに「三美展覧会」の活動を中心に紹介しながら地元島田の美術家たちの文化・芸術活動を探ることにする。この展覧会は「三美」の名が示すとおり書道・絵画・写真の三つの部門の美術展で構成され、2回ほど開催している。当日のチラシや出品目録を見ると、第一回は大正9(1920)年1月2日から6日までの5日間、島田小学校男子部講堂で、第二回は大正 13(1924)年1月2日から6日までの5日間、島田第一小学校で開催されている【画像 12・18】。

第一回目の三美展覧会では、その目録から【画像 14・15】、まず書道部門(かな・行・楷・草・隷書・

碑文・碑拓本作品)で、当時の書道研究の第1人者高田竹山の「書體變遷の大要」と題する古文から草書体等の同じ漢詩を書いた10作品が出品されている。この展示は書体の変遷が辿れるものであり、展覧会の目玉展示となっている。また、同年11月には、蘭契会編による高田竹山が揮毫及び校閲した冊子『書體變遷大要』(序を置塩棠園が寄稿)が展覧会の記念に作成されている【画像16】。展覧会はこの展示後に県外及び東京の書家、己未書道会員の作品や地元(出身)書家の作品(清水不白、荒波煙涯、置塩棠園、清水聰秋、天野緑天) 、そのあとに島田実科高等女学校生徒(現島田高等学校)の作品と続く。その中には、当時の書家の作品ばかりでなく、清水、置塩、天野各氏所蔵の桑原必堂、霜涯、物外などの地元の故人となった文人(書家)の作品や、石野雲嶺、巌谷一六、日下部鳴鶴といった島田ゆかりの故人となった文人の書作品も展示されている。

次に畫道部門(水彩・油画・日本画作品)では、東京在住の大家作品や県内及び地元作家の作品、中・高等学校(師範、女学校)生徒の作品が出品されている。特に水彩・油画部門では、東京在住の画家で当時中央画壇を中心に活躍していた吉村吉松、牧野虎雄、和田英作等の名があり、静岡師範の学生であった金谷町出身の滝沢清も水彩画2点(「雨の町」「ばら」)を出品している。滝沢は当地方での水彩画家の魁としてその活動が注目される。その他、地元作家の作品としては、水彩画で、蔦山菊次、橋爪吾一郎の風景画や美人画、日本画では八木利一、松本昇、清水聰秋の山水、花鳥画の出品がみられる。また、物故画家のとしては清水、天野、佐野の各氏及び静居寺が所蔵する桑原桂叢や飯塚九如、山本拝石、春堰の山水、動物画等の作品が展示されている。

最後に写真部門を見ると前述した書・画部門と同様、東京、静岡県内、島田町内及び周辺の個人作品と写真館からの出品である。作品の出品総数は159点におよび、そのうち島田町内写真愛好家からの出品は60点を数え、町内の写真愛好熱が高まっていることがわかる。この数字の裏には、清水真一を中心とした写真同好会の活動が推測できる。清水は幼少の頃から写真を趣味とし、この展覧会の2年後の大正11(1922)年には「島田フォト倶楽部」を創設している大正13(1924)年に開催された第二回三美展覧会の際には後援団体となっている)。また、同倶楽部は本展覧会の主催者の一員であり、東京の写真家はもとより県内及び島田周辺の愛好家や写真館に広く作品を募集して展示したことがこの展覧会目録から推定できる。このように三美展覧会は、 出品数は書・画・写真部門合せて500点余りを集め、来館者数も5日間で約3,000人を数えかなりの盛況だったことが『書體變遷大要』の巻頭言にも記載されている【画像17】。

第二回三美展覧会については、前述したように1回目の展覧会から4年後の大正13(1924)年に開催されているが、最初の展覧会と違った点は、その間に蘭契会のもう一つの大きな事業である文化講壇(大正10年～昭和6年・1921～1931年)や夏季講座(大正12年～昭和8年・1923～1933年)が開設されていることである。そのなかで特に文化講壇の大正13(1924)年1月3日から6日まで組まれている講演会(第11～14回)については、第二回三美展覧講演会として展覧会の事業に組み込まれ、展覧会場である島田第一尋常高等小学校講堂で午後7時から行われている。この講演会の講師には、チラシの開催内容【画像18】をみると、展示されている書・画・写真の分野から美術家や研究者など当時の第一人者を招聘していることがわかる。展覧会とそれに関連した講演会のマッチングである。

講演内容は、書部門では後に「現代書道の父」と呼ばれる書家比田井天来(鴻)が「書道沿革」と題し講演を行い、画部門では東洋画(日本画)で東京美術学校教授大村西涯が、東洋美術史の観点から「東洋画の神髄」を論じ、西洋画では草土社同人の画家岸田劉生が美術家の立場から「美術品の非恒

久性と美術の真価に就いて」を写真部門では東京美術学校教授森芳太郎が「調子の選択」をそれぞれ講演している。また、「展覧と講演」と題したチラシの裏に「第二回三美展覧講演會に際して」として主催者である蘭契会同人の挨拶文があり、その文面からこの事業についての主催者の意図が読み取れる【画像 19】。

ここでは以下、挨拶文の抜粋を紹介する。

「(前略)私共は鑑定や評價を事とする所謂書畫の展示會や、正札付の作品を陳列して好事者の心をそゝる頒布會や、又多額の金品を囮として射倖的の出品を集める敵本主義の競技會など、世間に多く見られるゝそうした催しの全てはある目的、ある場合ある意味では決して悪いとは思ひませんが、而し其等の内には藝術に對して可なり不要な夾雑物の混在を認める事が出來ます其程度の高下は兎に角として作者も觀衆も主催者ももっと純なる心持で藝術に直面することは出来ないでしょうか、藝術を単なる手段として弄ぶ様な事をしないで藝術其物を目當として進むことは出来ないでしょうか、平素から環境の刺激にこんな事を考へさせられた私共は、茲(ここ)に作者と観衆と主催者とを特殊な意味で聯繋(連携)する郷土的作品を經とし、純眞と自由とに飽和された心性の持主である小学児童の作品を緯とし、之を彩るに敬愛せる先輩や知友の作品を以てし、斯様にして幾分共醇化された催をと試みました、そして又それを一層有意義ならしむる為めに夫々先學の方々を聘して各科に関する御講演を願ふ事にいたしました、(中略)こうした私共の心持を御酌み下さって御鑑賞が願はれますれば誠に本懐の至であります。

大正十二年十二月　　島田町　蘭契會同人　」

この主旨は、当展覧会の展示内容に強く反映されていくことになる。これを踏まえてさらに展示内容を目録【画像 20】からみると、前回の展覧会と同じように書・畫(画・東洋・西洋画)・寫眞部門の順に、各部門、県内外の一般応募者の作品、中央画壇で活躍する書・画家・写真家の作品、島田にゆかりのある文学生の作品を展示している。

書道の部、一般公募では島田からは秋野祐二、松村せつ子の名がみられる。近隣地域からは藤枝の沖六鳳、東京からは、巌谷一六、日下部鳴鶴といった島田ゆかりの文人の門下生や交流のあった書家が名を連なれている。久志本梅荘、近藤雪竹、辻香塢、井原雲涯、丹羽海鶴や「五体字艦」を編纂した松田南溟、そして前回の展覧会でも取り上げられ今回講演会の講師を務めた比井田鴻(天来)などが出品している。その他島田ゆかりの文人の作品としては、八木、天野、森、置塩の各氏が所蔵している山梨稲川、頼山陽、宗長、桑原苾堂、桑原南田、置塩綯齊(維則・置塩家 11 代当主、棠園の長兄)の書が出品されている。

東洋画(日本画)については、その出品数が少なく島田からは唯一、松本梅所(花鳥画)の名がみられる。その後に、当時活躍している日本画家長谷川香苔(山水画)、山下青涯(人物画、花鳥画)の作品が展示され、島田ゆかりの文人である平井顕斎、桑原桂叢、置塩綯齊、飯塚九如(大正5年没)、清水聴秋(大正 10 年没)らの山水画、風景画の作品を天野、置塩、清水、八木氏が出品している。

西洋画一般公募では、島田から町井文子(静物画)、青島金一(風景画)が出品しており、県内では静岡師範や静岡、用宗在住の愛好家の作品が目立つ。東京からは、今回講演を行った岸田劉生(肖像画、風景画)をはじめとして、岸田と親交のあった画家、創土社の前進であるヒュウザン会の鈴木金平(風景画や肖像画)や創土社のメンバーである椿貞雄(風景画)、当時中央画壇(帝展、一水会、二科展)で活躍していた鈴木良三(静物画、風景画)、関根正二(パステル、デッサン、ペン画)、富澤有為男などが出品している。

この展示のあとには、泰西(西の果て、西洋諸国)名画複製品として約 50 点を展示している。展覧会「出品目録」の裏「美術の華」(青林檎社編)にその解

説が付されている【画像 21】。内容は、ルネッサンスから印象派までの西洋美術の変遷をレオナルド・ダヴィンチやレンブラント、ミレー、ゴッホ、セザンヌ、ルノアール、ロダン等の彫刻や洋画の名品を紹介しながら解説している。学生や一般市民に向けた教育普及を考えた展示と考えられる。さらにそのあとには中等学校生徒作品十数点が展示されている。

寫眞部一般公募作品では、出品数 52 点の内 45 点ほどが島田地区愛好家の作品である。前述したように蘭契会の中心人物である清水真一は大正 11(1922)年に「島田フォト倶楽部」を創設し、今回の展覧会の後援団体となっている影響が色濃く反映されているものと推測できる。そのあとに「寫眞藝術社」などの参考印画が展示されている。

そして三美展の最後には、児童作品がみられる。出品小学校は 21 校を数え、島田周辺では、伊太、六合、相賀、島田一、二、神座小学校で、近隣では青島、藤枝、葉梨、大洲、焼津小学校と続き、静岡周辺では城内、新通、静岡男師、女師小学校、阿部郡西豊田、有度小学校、西部では、濱名郡曳馬、和地小学校が参加し、県外では京都稚松小学校や奈良女高師付属小学校が出品している。詳細な記載は無いが、書・画作品が展示されたと考えられる。この展示を見ると主催者(蘭契会)の目的でもあった「(前略)茲(ここ)に作者と観衆と主催者とを特殊な意味で聯繋(連携)する郷土的作品を經(たていと)とし、純眞と自由とに飽和された心性の持主である小学児童の作品を緯(よこいと)とし、之を彩るに敬愛せる先輩や知友の作品を以てし、斯様にして幾分共醇化された催をと試みました(後略)」との趣旨に沿った展示手法を実践している。

また、特別鑒(鑑)賞室では、碑版、法帖、書、畫帖、横巻、その他参考作品として約 50 点を展示している。

このように第二回三美展覧会は、第一回同様 500 点以上の作品を集め、来館者も 6,000 人ほどを数え盛況に実施されている。その背景には、当時一流の美術家や美術を追求する学者の講演と展覧会を連携して行ったことが話題となり、当地方の地元の美術家を刺激し、さらに多くの町民、県内周辺地域人々を巻き込み好評を博したと考えられる。また、展覧会の主旨にもあるようにあくまでも純粋な美術鑑賞を追求し、小学生から一流の美術家までの幅広い作品を一堂に会して展示し、当地方においての学校教育から社会教育まで幅広い人々の文化的思考の高揚に多いに貢献した事業となっていたことが想像できる。

２．温知洞展覧会に見る昭和期の文化・芸術活動

ここでは、前述した明治・大正期における当地方の文化・芸術活動状況が、昭和期に入りどういったかたちで継承されたかを考えてみる。昭和期の活動については、蘭契会の一員であった清水真一が開設した「温知洞」画廊(経営するチシン薬局に隣接)の特に美術活動を通してみることにする。清水は、三美展覧会で培われた「純粋な美術鑑賞」を同画廊で実践するのである。

温知洞の活動は、清水が記録した「温知洞開催諸展覧一覧表」で知ることができる。昭和 11(1936)年から 19・20(1944・45)年の戦中の中断をはさんで昭和 37(1962)年まで展覧会は通算 422 回を数える。そのなかで戦前の当洞の活動は、昭和 16(1941)年までは清水が主催して行われている。主に氏が主宰する写真同好会である「瑤光会(ようこうかい)」(昭和 11(1936)年に設立)展が多く開催されている(第1回から第 19 回瑤光会展【画像 42】)。この会は、その前身である大正11年に氏によって設立された「島田フォト倶楽部」の活動を継承するもので、年数回開催される撮影会を基にその発表の場として展覧会を実施している。前述した三美展覧会寫眞部門にも島田から多くの出品者を輩出した背景にもなっている。その活動は一時中断するが、再び温知洞の開設と時を同じくして「瑤光会」として活動を開始し、温知洞を会場に大井川流域の風景などを記録した撮影会の成果を発表し

ている。また、そのほか昭和 7(1932)年に知新薬局屋上に私設天文台「知新観象台」を開設し、その写真観測成果を発表する天文写真展や、上位団体である「日本写真会同人」展【画像 43】、地元の話題である島商修学旅行写真展、島商野球部活動写真展、大井川渓谷写真展、個人の写真展などが開催され、昭和 16・17(1941・42)年の展示会では、将兵慰問写真展や東日太平洋戦写真展(東京日日新聞社)、大戦写真展(読売新聞社)などの戦時に関わる写真展などが多く行われている。このような経過を見ると、当初は清水主催で展覧会を実施し、徐々に個々の美術鑑賞への機運の高まりを促していったものと考えられる。

○温知洞展覧会に見る魁の美術家たち

温知洞で開催された展覧会のなかで、写真展以外の美術展がみられるのは、昭和 16(1941)年の展覧会で「南堰画会(日本画)展」【画像 22】や「島商絵画展」【画像 23】が開催されている。特に「島商絵画展」は、島田商業高校美術部の作品発表会で、その指導にあたったのが当時美術部の顧問を務め、白日会、三軌会、日展等、中央の美術団体の会員として活躍していた塩沢祥悟(月山)であつた。塩沢は、島田では島田第一小学校(向谷小学校:昭和7～13 年・1932～1938 年)や島田商業(昭和 14～20 年・1939～1945 年)で教鞭をとるかたわら自身の画業の精進はもとより、向谷洋画研究所を開設し、後進の指導や児童教育にも力を入れている。この展示会では、高校生、若者への美術教育の一端が伺える。その他の活動状況を温知洞での展覧会の様子で見ると、「白日会洋画展」を昭和 22(1947)年から 24(1949)年の間に3度開催している。昭和 23(1948)年 11 月の展覧会の案内には「塩澤祥悟氏を中心とする近地同志の近作を展覧します」と記されている。

塩沢資料のなかにも当時、白日会に出品された作品の絵葉書資料が残されており、その活動の一端が伺える。また、昭和 28、29(1953・54)年には「塩沢画塾児童画展」や「向谷洋画研究所展」を開催していたことから、晩年は児童教育に力をいれていたことが想像できる。そして没(昭和 31・1956 年)後の昭和 32(1957)年、滝沢清、大久保覚郎、芝田晨弥、平松幸子、清水真一によって「塩沢祥悟先生を偲ぶ洋画展」が開催されている(後援島田市教育員会)【画像 24】。その案内には「島田は誠に先生の第二の故郷であり且島田の画壇は先生により開拓された面も頗る大きい事を思いまして茲に生前辱知の数人相謀り先生の遺作を中心に此小展を計画し先生の画業と功績とを偲びたいと存じます。」とあり、塩沢遺作数十点と息子慎介の作品、主催者らの小作品を展示している。この資料からも伺えるように、塩沢氏の島田地区での戦前からの画業の足跡は、まさに当地方における美術界の魁となるものであろう。

戦後になると、温知洞における展覧会は本洞主催のものだけでなく、島田保健所や島田郵便局など公的機関の展示に混じり、絵画や書道【画像 47】などの美術団体や画家の個展が開催されるようになる。ここで注目されるのが、まず金谷出身の画家滝沢清の展覧会である。昭和 23 年 11 月に「滝沢清氏小品展」【画像 26】開催を皮切りに昭和 35(1960)年 1 月の「滝沢氏馬籠展」まで、実に 11 回の展覧会を実施している。こうした滝沢画伯の一連の展覧会は、温知洞における個人の個展開催数としては最多となる。滝沢の画歴を辿ると、前述したように大正9年に行われた蘭契会主催の三美会展覧会にすでに静岡師範時代の水彩画を出品している。静岡師範学校卒業後、画家を目指し上京して石井柏亭に師事し、白日会、光風会、一水会、二科展等の中央の美術団体で活躍しており日本水彩画会員に推挙されている。昭和 20(1945)年(滝沢 45 歳時)には金谷に戻り、島田高等女学校(現島田高校)で美術教員を9ヶ月務めている。さらに昭和 23(1948)年に静岡県美術展第2回の審査員に選出され、昭和 24(1949)年には「新水彩作家協会」(後の「三軌会」)創立にも関わっている。画家としても円熟期を迎え、地元の美術普及活動にも積極的に取り組んでいる時期である。このよう

な時期に温知洞での個展を始める。自身の個展は、前述した小品展、昭和 24(1949)年9月「滝沢氏九州旅行展」、昭和 31(1951)年 11 月「滝沢氏洋画展」、昭和 35 年 11 月「滝沢氏馬籠展」を開催している。その他「滝沢画塾童画展」、昭和 28(1953)年1月、29(1954)年2月「滝沢塾女流すみれ会展(1・2回)」【画像 27～29】、昭和 29(1954)年9月、30(1955)年4月「滝沢塾つくし会展」、昭和 31(1956)年 11 月「滝沢塾銀の星童画展」などが開催され、これらの展示会から幼児から大人まで後進の指導に力を入れていることが伺える。実際には金谷の自宅(「滝沢美術研究所」)を会場に絵画教室【画像 30・31】が開催され、主に金谷・島田地区から多くの門下生を輩出している。

次に日本画家青島蘭秀(らんしゅう)・淑雄(ひでお)の活動を紹介する。青島親子が関わるグループ展や個展が、温知洞では7回ほど開催されている。蘭秀は、明治、大正期を中心に地元で活躍した日本画家で、その3男に生まれた淑雄は幼少期から日本画家を目指している。

父親の英才教育を受け、昭和 22(1947)年には 15 歳で静岡県芸術祭に史上最年少で初入選し、昭和 24(1949)年には日本画家中村岳陵に入門、その翌年には日本美術展覧会(後の日展)に初入選を果たしている。当時は新進気鋭の日本画家として将来を嘱望されていた時期である。そのような時期に温知洞では、昭和 16(1939)年4月に開催された「南堰画会(日本画)展」(蘭秀が参加)や昭和 22(1947)年 12 月「青島氏日本画展」、昭和 24(1949)年5月、昭和 25(1950)年8月「大井川画人協会展(第1・2回、青島親子で参加)」、昭和 26(1951)年3月「青島淑雄邦画展」と精力的に展覧会を実施している。また、昭和 28(1953)年2月、29(1954)年3月には「青島氏(淑雄)日展作とみどり会展」、「青島みどり会童画展」などを開催し、日本画の普及にも力を注いでいたことがわかる。

ここで当時の展示会の様子と美術家たちの関係が伺える資料を紹介したい。その資料は、『市民』(現『広報しまだ』)通巻第 27 号「市民の声」に掲載された、大久保覚郎(かくろう)の投稿記事「大井川画人協会展を観て」【画像 25】で、以下引用文を紹介する。

「最近本市において洋画展覧会が活発に行われるようになったことは誠に喜ばしい。それは戦後数ヶ年索莫とした生活に沈淪してきた我々の心にほのかな希望と安らぎの微光を投ずるものである。しかもこれが生活文化の低調な我が郷里島田市において花開きつつあるということは何という喜びであろう。

(中略)それにつけてもこのような状態を導き出した三人の存在を忘れてはならない。その中の二人は郷土の生んだ画家滝沢清氏と塩沢祥悟氏であって、ともに戦時戦後の混乱の嵐の中にも屈することなく世人の忘れ果て、省みなかった美の殿堂を守り続けたのであるが、他の一人はこの二人の画家の良き理解者であり、かつその作品発表の機関として常に快く自己の画廊を提供された清水真一氏である。誠に清水真一氏の温知洞画廊は島田市文化の拠点であるが、二人の絵画人にとってもこよなき砦であった。こうして島田市における美術は興隆におもむきつつあるが、この時同じく日本画の分野においても青島蘭秀氏等の努力によってこの画廊を足場として大井川画人協会(大井川に育まれた日本画家集団)がその第二回展を開催されたことはまことに大きな喜びである。(後略)」と綴っている。この後記事のなかでは、大久保氏の出品作品への所感が述べられ、青島淑雄や滝沢清(風景画(水墨淡彩？画)2点)、中村稔、青島蘭秀、松下古風、藤田華陽、深見月城の画家の出品が確認できる。そのなかでも、「(前略)この会でも他に松下古風、青島蘭秀氏のように年齢的に古い作家と青島淑雄氏、中村稔氏のように年齢的に若い作家がいるが、前者はいわゆる地方において常に散見する水墨日本画的様式の中にいるのでとに角として若い作家は現代の息吹の中で近代的な写実の世界に生きようとしているので、その作品は洋画に非常に近いものである。(後略)」と評している。特に青島淑雄氏の作品(人物画3点)については、目

を見張るものがあり「私はこの若い画家の将来に深い望みをかけているものであるが、さらに内面的なものの表現される日を望みたい。」と評価している。
この記事は、大久保の個人的な評論ではあるが、当時の温知洞での日本画家を含めた画家の活動の一端が伺える数少ない資料であると考え提示した。

また、この「市民の声」に投稿した大久保も画家であり、当時の島田の美術家たちを支える指導者であった。ここで氏の活動についても少し触れておきたい。大久保は若くして画家を目指し、上京して働きながら同舟会洋研究所で絵の研賛に励み、白日会展等で活躍する。その後地元に戻り、新水彩作家協会展で受賞を重ね委員に推挙、静岡県水彩画協会設立に参加するなど、当地方の指導者として後進の指導にも力を入れている。温知洞での自身が主催する展覧会の記録は、昭和 26(1951)年5月「大久保塾童画展」、昭和 32(1957)年5月「島児童画展」などがある。大久保の後輩である画家安藤節雄は、「島田の美術家の思い出」(『島田・金谷の美術家たち』 島田市博物館 平成 18・2006 年)のなかで、大久保のことを以下のとおり書きとどめている。

「(中略)大正後期と昭和の初期とが混在していた。中年の大久保氏、勝見氏、伊藤氏、荒井氏などは、大正ロマンの時代(昭和初期)の西洋文化への憧れが、日本絵画芸術もこれからというとき戦時体制となり閉ざされてしまった。昭和の初期時代、彼らの青春は闇の中で断絶してしまった。不幸そのものである。戦争がなければ、大正・昭和にかけ西洋文化が、絵画では印象派が日本の芸術をどんな風に変遷させたか、悔しい気持ちだ。大久保先生などきっと中央画壇で活躍しただろう。人物画では、県下で右に出る人はいないデッサン力を持っている。プロ的な存在で、水彩画家としては滝沢先生と同格の画家である。戦争という忌まわしい時代がなかったら、彼の運命も変わっていたのではないか。絵の手解きは彼がしてくれた。(後略)」。

以上、温知洞に記録される昭和時代戦前から戦後まもなくにおける島田地区の絵画部門の礎を築いた魁の美術家たち4人の活動の一端を紹介した。

その他画家やグループ展の展覧会としては、島田出身の日本画家平口勝雄(平)、昭和 25(1950)年 11 月「平口勝雄氏邦画展【画像 46】、昭和 31(1956)年 10 月「平口勝雄氏日本画家の油絵展」や、昭和 25(1950)年から 31(1956)年まで開催された「こうよう(康陽)会洋画展」、「こうよう会童画展」などの記録がある。また、清水真一氏ゆかりの画家として、鈴木金平の「かすみ版展」【画像 45】や小川幸彦などの現代版画展【画像 44】などが、昭和 23 年から昭和 31 年までの間に温知洞によって主催されている。

○温知洞展覧会に見られる次世代の美術たち

その後の美術家たちの展覧会の様子を見ると、先に紹介した当地方に礎を築いた美術家たちやその周辺画家の指導のもと、昭和 25 年以降から新しい世代の画家が集い、グループ展が盛んに行なわれるようになる。また、公的機関による市民参加型の美術展、所謂「社会教育」を目的とした展覧会が温知洞で開催されるようになる。ここでは、その展覧会の状況を紹介し、次世代の美術家たちの活動を探る。

まず取り上げたいのは、戦後まもなく島田で結成された絵画グループ「茜会(あかねかい)」の活動である。その名の由来は江戸時代後期の金谷宿の文人(南画)である「永村茜山(ながむらせんざん)」の一字をとって滝沢清が銘名したものである。「茜会」には、滝沢の指導のもと、大久保覚郎、伊藤豊成(とよなり)、勝見宣夫(のぶお)らを中心に絵を志す若者が多数集まっている。水野重蔵、西村正夫、新間理吉、岡島加根(かね)、荒井赤城夫、北村ていじ、三内芳彦、大釜一也、安藤節雄である。先に紹介した安藤の「島田の美術家の思い出」(『島田・金谷の美術家たち』 島田市博物館 平成 18 年) のなかで、茜会設立の経過についても以下のとおり記されている。

「(前略)あの忌まわしい終戦、日本思想の断絶、そして、生活苦。そんな中で新しいアメリカ的な考え方が私たちを夢中にさせた戦時中の抑圧の中から、解放的な思想が自己表現の方に思考させたのではない

か。その時代「デカダンス」という言葉が流行った。頽廃の中から新しい生き方の出発点として、自己表現に走れたのだろう。日本思想の断絶から頽廃があり、頽廃的な生活の中から自己表現(再生)を求めたのだ。そんな若い人々はたくさんいた。文学、絵画、演劇、各サークルが自然発生的に生まれた時代であった。それが現在にいたっているのか判らないが、泡沫(ほうまつ)となったサークルもあった。その時代に「茜会」が生まれた。滝沢先生が指導者で、世話人は大久保、伊藤、勝見先生。それに、本屋を営んでいた荒井さんなど当時35歳過ぎの中年だった。若い僕(結成当時安藤は20代前半)らが求めていた新しい時代に向かっての自己のあり方を彼らも思考していたのだろう。同じような気持ち、同じような情熱を持って、自己のどうあるべきかを絵という表現に求めたのだ・・・と私は思っている。(後略)」と述べている。

このなかでは滝沢が中心となり、大久保や市内で医療に従事しながら美術活動をしている伊藤や勝見らが世話人となり、多くの若者が「茜会」に参加している状況がわかる。温知洞では昭和26年1月「あかね会洋画展」、同年11月「第4回あかね会展」、昭和27(1952)年4月「第5回あかね会展」、「あかね会美術小映画会」、昭和29年6月「あかね会展」を同会主催で開催している。また、川根方面へのスケッチ旅行【画像32】や旺玄会(おうげんかい)所属の画家堀田青治を講師に招き、島田第一中学校で絵画夏季講習会を開くなどの活動(昭和30年代)も展開している【画像33】。後年には茜会の有志及び周辺画家により独自の展覧会も開催している。北村、安藤による昭和34年7月の「スケッチ展」や、西村、緒方、新間、北村、安藤による昭和35年5月に実施された「五人絵画展」などである。

次に昭和28年に茜会の中で気の会う仲間、三内芳彦、北村ていじ、大釜一也、安藤節雄らが中心となり「井蛙会(せいわかい)」を結成する。井蛙会は、昭和20年代後半から昭和30年代前半にかけてグループ展を盛んに開催している。温知洞では、昭和28年3月「第1回井蛙会洋画展」【画像34・35】、同年12月「井蛙会第二回展」、昭和33(1958)年1月「井蛙会展」などが記録に残る。安藤は、当時の井蛙会展覧会の様子を「島田の美術家の思い出」(『島田・金谷の美術家たち』島田市博物館 平成18年)のなかで以下のとおり後述している。

「(前略) 昭和28年頃、「井蛙会」は4人で第1回展をやった。原稿の声明文は私が書いた。北村氏が清書した。知新画廊(温知洞)の右側の壁に貼ったのを覚えている。真っ白い模造紙が新鮮で私たちの出発に相応しいと思った。過去の忘却の底で、そこだけは鮮明に残っている。私たちはこの観展を境に、抽象形態の制作活動に入ったような気がする。大釜氏は「地底の花」とか黒にフォルムを虜にした檻のような抽象作品を描いた。三内は石化した朽ち木を並べた。そこには常に不安があって、それを表現しているのか不安の中から自己を奮い立たせようとしているのか、抽象形態の中で確かな型と真実を求め、私たちは戦っていたのだが、それが、あの様な形で現れたのだろう。三内の知事賞の絵は、具象から抽象形態に移る表現として、心の移り変わりが理解できる新しい作品であった。彼はこの作品から自由に抽象の世界に入ることが出来たのだ。大釜氏は県展で受賞してから、上野博物館文化財研究所に転勤した。東京での個展は評判が良かった。美術手帳にも彼の作品「東京原人」が批評入りで小さいながら掲載された。絵本も2、3冊くらい描いていた。東京では三軌会の委員で滝沢先生の片腕になった。(後略)」

このようにお互いに刺激し合い、切磋琢磨した井蛙会の活動は、北村、三内、大釜、安藤にとって具象から抽象に表現する転化点となり、やがて静岡県水彩画連盟展や中央画壇へ作品を発表していく足がかりとなっている。

そして、昭和26年からは、温知洞をメイン会場に島田市社会教育委員会(現社会教育課)主催の「第1回島田洋画展」【画像36・37】が開催されている。当洋画展は昭和32年の第7回まで行われ、その運

営を塩沢祥悟や茜会の滝沢清、大久保覚郎らが支援し、茜会及び井蛙会のメンバーもたびたび入賞・入選を果たしている。また、審査委員には当時中央画壇で活躍していた美術団体各会派の画家を招聘している。第1回の審査委員には、静岡大学の松岡圭三郎、地元からは塩沢、滝沢が委嘱され、第2回目以降では、日展審査委員の堀田清治、国画会員の青木達弥(掛川在住)、独立美術協会員の高畠四郎、同協会員の鳥海青児、東京学芸大学教授の倉田三郎、二科会員の北川民次(金谷町出身)が委嘱されている。これらの審査委員選出についても、その背景には、塩沢や、滝沢、大久保といった当時の指導者たちの中央の美術団体との深い繋がりを伺わせるものである。この展示会の運営については、美術家たちが島田市(社会教育課)と協働して、学生を含めた市民に美術教育を広く普及したいという熱意の感じ取れる事業であった【画像 38・39】。実際にこの洋画展で、入賞・入選した美術家たちが、塩沢、滝沢、大久保以降の次世代の活動の中心となり新たな指導者となって、当地方の絵画部門の文化芸術活動を背負って行くのである。伊藤豊成、北村ていじ、勝見宣夫、芝田晨弥、水野重蔵、新間理吉、三内芳彦、安藤節雄、大釜一也、田中節子たちである。一方、この「島田洋画展」の開催は、本格的な市民文化祭の先魁として、当地方の絵画に携わる美術家たちが当時の文化芸術活動をリードしていたことを伺わせる展覧会である。その実績は、その翌年に開催される「島田芸術祭」(昭和 33 年から 45・1970 年まで、13 回開催)に引き継がれ、令和2年度で第 63 回を数える「島田市民文化祭」の礎となったと思われる。

その他、温知洞の展覧会では金谷で活動していた絵画グループが主催する展覧会の開催がみられる。最後にこのグループの活動について触れておきたい。この絵画グループは、黒田雄次、高木長作、野崎策次郎、小林義司、山内安平、山下朝治らが中心となり昭和 27 年頃に結成され、滝沢清の指導のもと、滝沢氏の奥様が聖書から引用して「稚樹会」と銘々されている。その活動はスケッチ旅行やデッサン研究会、展覧会への出品にとどまらず、お茶まつりの仮想行列や文学散歩など文化協会の一員として幅広い文化活動に参加している。昭和 33 年には「新層美術協会」と改称され、現在の「金谷絵画クラブ」に引き継がれている。この「稚樹会」の展覧会活動は、温知洞では昭和 28 年2月の「金谷稚樹会洋画展」、昭和 29 年2月「金谷稚樹会展」の2回ほど実施されている【画像 40(参考)】。また、先に触れた「島田洋画展」や「島田芸術祭」にもこの会員が出品を重ね多くの入賞・入選者を輩出している。

こうした戦後の温知洞での展覧会の活動については、島田、金谷地区の美術家たちがともに滝沢先生の指導のもと、両地区とも昭和20年代後半には絵画グループを立ち上げ、次世代を担う美術家として、時には合同の展覧会を企画し(昭和35年3月「島田・金谷地域 絵画グループ展」を静岡市吉見画廊で開催(【画像 41】)、市民展や県、中央の美術団体が主催する展覧会に応募するなど、切磋琢磨しながら独自の活動の輪を広げていった様子が伺える。

3. まとめにかえて

今回は特に明治期の島田における展覧会資料「島田学校開業書画展」や大正期の蘭契会主催による「三美展覧会」の様子、昭和期の「温知洞」における展覧会の状況をもとに、各時代を通じてそのなかに登場する美術家や関連する講演会の活動状況を中心に紹介した。これらの活動の前提には、前述したように江戸時代後期『東海道人物誌』に登場する文人やその後、桑原家などの名家が輩出した文人と交流のあった文人、美術家たちとの活動が礎となっている。

明治期以降、これらの資料をみていくと、『東海道人物誌』に記載された文人の後継者である飯塚九如、天野廉たちが地元の名士たちと連携しその活動を引き継ぎ、大正から昭和時代初期では置塩棠園

や蘭契会員である清水真一や八木利一らが中心となり牽引している状況が伺える。また、江戸時代に残した文人の作品についても保管・継承され、展覧会で公開している状況が確認できる。このような土壌のなかで昭和期に入ると、当地方の文化・芸術活動は、清水真一が設置した温知洞(画廊)での一連の展覧会にみられるように広く一般市民に浸透し萌芽していく過程がみられる。特に、絵画部門でそれが顕著に検証でき、日本画では、江戸から明治時代に継承された伝統的な作風から現代的な作風へ、洋画では、戦前から戦後にかけての世代交代のなかで具象から抽象へと推移する状況が読み取れ、それがやがて昭和 30 年後半には市民レベルまで普及する状況がわかる。江戸時代に萌芽した文人の精神が昭和期の個々の自由な文化・芸術活動に繋がっていく。この活動がやがて公的機関が実施する「市民文化祭」に引き継がれることになる。

今後は、当地方の特性のある文化芸術活動を後世に伝えるためにも、絵画部門だけではなく、江戸時代から各部門で活躍した美術家(文人)たちの残した作品とともにその背景にある文化・芸術活動の足跡の調査研究を行い、その作業を近現代まで広げていく必要性を感じる。こうした調査の積み重ねにより当地方の江戸時代から現代までの文化・芸術活動の変遷が解明でき、しいては当地方の特有の価値観や文化形成の一端を知ることに繋がる。美術作品も美術的価値ばかりでなく史料的価値として、一つの要素を担うものと考える。時には、歴史史料(古文書ほか)や民俗資料と連携して考えることも必要となり、当地方の歴史や文化を構築するためには欠かせない史料となる。こうしたことから、他部門である書や写真部門の美術家たちの動向も含めて、島田・金谷・川根地区の文化・芸術活動について調査・研究をさらに深めていく意義を強く感じるものである。

【参考文献】

・『島田学校書画展覧録』1878 年
・『三美展覧会出品目録』島田蘭契会 1920 年
・『書体変遷大要』島田蘭契会編 1920 年
・『第二回三美展覧会出品目録』蘭契会 1924 年
・第二回三美展覧講演会『展覧と講演』(チラシ) 1924 年
・『第二回島田洋画展出品目録』島田市社会教育委員会 1952 年
・『第四回島田洋画展出品目録』島田市教育委員会 1954 年
・『島田市史下巻』島田市 1973 年
・『島田の学校史－明治・大正・昭和のアルバム-』島田市教育委員会 1988 年
・大久保覚郎「大井川画人協会展を観て」『市民「市民の聲」』通巻第 27 号 1950 年(『広報しまだ復刻保存版Ⅰ』島田市 1991 年)
・第一回島田洋画展『市民「リポート」』通巻第 37 号 1951 年(『広報しまだ復刻保存版Ⅰ』島田市 1991 年)
・『第 41 回企画展島田・金谷の美術家たち』島田市博物館 2006 年
・『東海道人物志・賀筵雲集録』復刻版 羽衣出版 2008 年
・『第 47 回企画展置塩棠園』島田市博物館 2008 年
・『第 48 回企画展島田市名誉市民清水真一の軌跡』島田市博物館 2009 年
・『第 50 回企画展郷土の画家安藤節雄抽象の世界』島田市博物館 2010 年
・『第 80 回企画展市民画廊すばると美術家たち』島田市博物館 2019 年